ヴァチカン：機密文書漏洩

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

ヴァチカンの内部ニュースは、ローマ法王、その特別秘書、国務長官だけが、それぞれ手紙、文書、資料に目を通して、吟味し、承知して、図書館内に文書として保管されるのが常である。ところが、昨年2011年の暮れ頃より、それらが次から次へと外部に漏洩していた。その漏洩のルートを調べるべく特別調査官も任命された。

2012年5月、出版社キアレレッテレ（chiarelettere）を通して『猊下』(Sua Maestà）という本が、ジャンルイジ・ヌッツィ(Gianluigi Nuzzi）によって発表された。その本には、法王への個人的内密の話、教会に関する提案、諸改革についての提案、教会会議の解放・改革・国際化、さらには聖職者の婚姻問題、女性の聖職者への任命等々が述べられている。外部の一般のものには分からない、ヴァチカン内部での意見の交換等の文書である。それらが、その本を通して暴露されたのである。ヴァチカンは調査の進捗を加速させ、2012年5月25日午後、ローマ法王の側近中の側近で、ローマ法王の執事、パオロ・ガブリエレが逮捕された。パオロ・ガブリエレは聖職者ではなく、在家信者である。46歳でローマ出身の既婚者、3児の父。前任者メモレス・ドミニと共に在家信者としては、ローマ法王に一番近い所にいた。そして、2006年より正式に法王ベネディクト16世の執事になったのである。

執事パオロ・ガブリエレの仕事は、ローマ法王が目を覚ます前より法王の住む宮殿に行かなければならない。勤務時間は午前6時より午後9時まで。詳しく述べると、午前6時30分、ローマ法王の着替えにアシスト。7時、ローマ法王の朝の個人的ミサに同席。8時、ローマ法王の朝食のサービス。11時、ローマ法王の特別謁見並びに一般謁見に同席。12時30分、ローマ法王の昼食サービス。19時30分、夕食のサービスとローマ法王のベッドの用意。それが終わって夜9時に解放され、ヴァチカン内にある自宅へと戻って行くのである。

ローマ法王の部屋に彼は自由に出入りできた。そのために法王の書斎の机の上にあった各種の手紙、書類をコピーして運び出していたのである。それを外部の人間、特にイタリア人のジャーナリスト、ヌッツィに手渡していた。逮捕された後、彼はヴァチカンの牢屋に入れられた。家宅捜査もなされた。多くの資料が発見され、4つの箱に収められた。また、撮影のためのカメラ、ドキュメント再生のための複製機も発見された。

以上のような動揺していた5月27日、5旬節（ペンテコステ・聖霊降誕祭）を迎えた。執事逮捕を知った法王は痛みを感じたようだ。しかし、日曜日の書斎からのアンジェラスでは次のように信者に呼びかけている。「教会は嵐の真只中にある。雨は降る。川は氾濫する。風は吹き、木々を倒し、家を破壊する。しかし、神の家は倒れない。それは岩の上に建っているからだ」と続け、信者たちを励まし、精神を新たにすることを願った。そして「成人し、成熟し、責任感を持ち、単純な時の風に流されない」ように信者たちに懇願した。

また、法王は5旬節の儀式で、説教の時には次のように述べている。「日常的な出来事に我々は拘っている。現代の人間は、より攻撃的になっているし、より衝突しやすいようになっている。現代は多忙を極め、『自我』に閉じこもって、自己の利益しか見ないようになった。我々はバベルの塔での経験とおなじように生きていることに気がついていない。現代では通信手段の可能性が増大した。それ故に相互理解はかなり前進したように思えるのだが、逆説的に、相互理解は退歩しているのだろうか。我々は同時に、エゴイストであり、寛容性の持ち主ではあり得ない。他の人のことを考え、他の人に奉仕することの喜びを見いだそう。それは常にキリストの精霊の助けが必要だ」。

牢屋に入れられたパオロ・ガブリエレは、かなり短期間で出獄するだろうと考えられていたが、すでに1ヵ月以上経過したが未だ獄中だ。牢は今までほとんど使われたこともなかった。牢の中にあるものはベッド、椅子、小さな机。部屋は冷暖房完備で、中庭に面した小さな窓がある。夫人との面会は今のところ禁止されている。夫人は着替えを持ち運び、時には薬も持って来る。それらは護衛官に厳しくチェックされている。内部にはテレビがないので、読む本も差し入れているようだ。

今回の事件は、逮捕されたパオロ・ガブリエレ一人の行為ではないと考えられ、バックには大物の共犯者がいると考えられている。ヴァチカン内部の抗争問題も絡んでいるようだ。5月27日、5旬節の祭日にもかかわらず、パオロ・ガブリエレが尋問されただけでなく、他の何人かも取り調べられた。しかし、誰であるのか一切発表がなかった。そのために、共犯者の名前、人数は全く公表されていない。騒動の発端となった本の著者ヌッツィは「我々の仲間は20人ぐらい」と言っているのだ。共犯者として想像されている中には、何人かの枢機卿も含まれているようだ。ヴァチカンは、報道官ロンバルディを通していろいろ公表しているが、共犯者に関しては蓋をしたままで、一切明らかにしていない。

ローマ法王ベネディクト16世は、昨年後半に故国ドイツを訪れた。カソリック信者の多いミュンヘン界隈では歓迎の辞が聞けたが、プロテスタント信者の多い北部地区では市民の反応は冷ややかだったようだ。多くのキリスト教信者はカソリックの大改革を望んでいるようだ。その中でも、聖職者の婚姻の問題が解決すれば、聖職者の性的小児愛症事件は激減するだろうし、女性の聖職者への登用は、人間の男女平等問題に画期的変革をもたらすだろうと考えられている。しかし、法王はその問題については、一切触れなかったので、ドイツ国民をはじめ、世界の多くの国々の人は失望したようだ。

しかし、ローマ法王は違う面でヴァチカン内部の改革を急いでいるようだ。今回の機密漏洩事件をヴァティリークス（vatileaks）と呼んでいるが、一刻も早くそこから脱出することを願っている。そのために、法王は6月23日午後6時に次の5人の“賢者”を招集した。オーストラリア人で71歳のジョージ・ペル、カナダ人で68歳のマルク・ウェエー、おぢばを訪れたこともあるフランス人で69歳のジャン・ルイ・トーラン、長らくイタリア司教会の議長を務めたイタリア人で81歳のカミッロ・ルイーニ、そして、スロバキア人で88歳のヨゼー・トムコである。この5名は教会奉仕の中でも、ローマのみならず国際的

（16頁へ続く）

天理大学雅楽部、国立劇場で伎楽公演

佐藤浩司

天理大学雅楽部は、６月２日、国立劇場主催第 34 回特別企画公演に伎楽で出演した。

伎楽は、『日本書紀』の記述によれば、推古天皇の 20 年（西暦 612 年）の条に、「百済の味摩之が、呉の国で習い覚えた伎楽を、大和の桜井に、真野首弟子、新漢濟文など少年を集めて、伝習せしめた」とある。明日香の大寺では、この伎楽の面や装束を備え、儀式に供するとともに、外国の使節の無聊を慰めるために演じられていた。天平勝宝４年（752 年）の東大寺大仏開眼法要の折には、伎楽が盛大に演じられた。ところが、平安時代以降、次第に演じられなくなり、しまいには、歴史の中から忽然と姿を消してしまった。それ故、伎楽は、「幻の天平芸能」と言われていた。

それが、昭和 55 年（1980 年）、東大寺昭和大修理落慶法要において、幻であった伎楽を復元し、演じることになった。曲は、芝祐靖、演技は、東儀和太郎、装束は、吉岡常雄、監修は、小泉文夫、笠置侃一、企画構成は、当時 NHK のディレクターであり研究者でもあった堀田謹吾氏など、当代一流の専門家によって幻であったものが現実のものとなった。この時、演奏と演技を行ったのが天理大学雅楽部である。雅楽部では、折角復元の緒についた伎楽を、より完成に近づけるため、参考にした『教訓抄』に出てくる演技全ての復元を企画、作曲を芝祐靖氏に依頼し、毎年の定期公演で取り上げることにした。1983 年、テーマを「酒」とした時の「酔胡王」に始まり、1990 年、テーマ「力」の時の「金剛･力士」をもって一通り完成したのである。

その後、新作伎楽も制作されるようになった。薬師寺では、毎年５月５日、玄奘三蔵の取経求法の旅を演じることになった。玄奘三蔵の中国とインド間の苦難の道中は、孫悟空が活躍する『西遊記』の物語で有名であるが、玄奘自身の手になる『大唐西域記』に基づいて物語を構成することになった。物語の構成を NHK の堀田謹吾氏が、曲は、芝祐靖氏がこれまで復曲したものを適宜使用することにし、佐藤が演出・監督を担当した。東大寺の伎楽と大きく違うのは、伎楽は本来、演技者が全て仮面をつけるところ、三蔵法師の役は素面で行うこと、また無言が基本であるところ、声明によって物語の筋が分かるように語られることである。東大寺の伎楽に対して、薬師寺のこの伎楽を、「新伎楽」と呼ぶようになった。

新伎楽「三蔵法師　求法の旅」は、玄奘三蔵院伽藍全体を使って、演じられる。伽藍の中央に八角の玄奘塔があり、南に礼門、北に絵殿（現在、壁画殿と呼ぶ）が配置され、礼門と壁画殿は回廊で繋がっている。礼門と玄奘堂の間に４間（7 m 20）四方の舞台が設けられ、演技はこの舞台を中心に演じられるが、玄奘三蔵は回廊を巡って旅の困難さを表現し、礼門や玄奘塔が、舞台転換のための重要な場となる。

新伎楽、「三蔵法師　求法の旅」は、平成４年、第１作「旅立ちの段」に始まり、平成５年、「高昌国の段」、平成６年「印度ナーランダ寺の段」、平成７年「仏典将来の段」、平成８年「訳経の段」の、全５作ができた。いずれも、三蔵法師の役を、名の通った映画や新派や歌舞伎の俳優がつとめ、声明を薬師寺の僧侶が担当した。平成８年からは、また、第１作に戻り、より完成度の高いものに仕上げる努力を重ねている。その流れでいえば、平成 13 年（2001 年）は、第５作目を再演する予定であった。しかし、玄奘三蔵院伽藍は、壁画殿に平山郁夫画伯の絵が収められて完成したとみるところから、この年は、記念の法要として、全５作を一つにまとめた、総集編を作成し、演じた。三蔵法師が天竺への留学を志し、苦難の旅を経て、ナーランダ大学で仏教の奥義を学び、多数の経典をもって、長安（現在の西安）へ戻り、訳経に従事するというストーリーである。この総集編は、コンパクトにまとまっているところから、評判がよく、その後、毎年５月５日の玄奘三蔵会大祭で演じている。

今回の公演は、２回に分けて演じられた。１回目は、午後２時からの公演で、薬師寺で演じている「玄奘三蔵求法の旅」の総集編である。２回目は、午後５時から東大寺版の伎楽である。１回目の公演では、薬師寺における伎楽法要そのままに、先ず四箇法要があり、その後、玄奘三蔵の求法の旅・総集編で、玄奘の役を狂言師の茂山良暢さん、声明を薬師寺の安田奘基師である。法要と伎楽２時間たっぷりの演技である。５時からの部は、まず、佐藤が伎楽の伝来の経緯と再興について解説し、伎楽が行道に始まり行道に終わるところから、行道によってそれぞれの役割を説明、最後の獅子奮迅に至る演技を行った。発売 10 日で全席完売という盛況で、伝来 1400 年に相応しい公演となった。

（７頁からの続き）

にも寄与している。その博識的な意見の交換をしたのだ。

ローマ法王は今回の事件を機にして、ヴァチカンの諸機構の改革を心掛けているようだ。それはヴァチカンの各省の見直しと議会の改変である。今までの機構はあまりにもローマ的であって、国際的ではない。カソリックが世界に広まり、活動が世界的に展開されているのだから、その元になるヴァチカン議会、各省も国際化されなければいけないと考えているようだ。

グローカル天理
第 13 巻　第８号　（通巻 152 号）
2012（平成 24）年８月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　深谷忠一
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan